

目的： 下着は上着とともに一つの服装を形成するが、現在では下着には本来的な保健衛生機能とならんで、ファッション性が強く志向されている。しかし、自己表現の場としての上着と、原則として上着の下に隠れて表に見えない下着との間には、着用意識に差異があると思われる。本報では、下着と上着の着用意識について学生・OL・母親を対象として調査を行い、それぞれの特徴について考察する。

方法： 東京及びその近郊に在住する女子学生（18～22歳）、OL（20～29歳）、母親（40～50歳）それぞれ200名、計600名を対象として、下着の着用意識に関する29項目、上着の着用意識に関する25項目について、質問紙調査法により調査を実施した。調査日は1990年11月である。調査データは単純集計、平均値の差の検定、相関分析及び因子分析により解析した。

結果： 因子分析（固有値1.0以上、バリマックス回転）により、下着と上着ではそれぞれ8個の基本因子が抽出された。（累積寄与率は下着53%、上着55.8%）。下着では、3者ともに下着は清楚であるべきだとしているが、学生とOLは実用性より装飾性を、母親は実用性をより重視している。また、OLと母親は、高級志向がうかがわれる。上着では、学生とOLは、自己顕示や心理的高揚感を求めるが、母親は経済性、実用性を重んじている。下着と上着の関係では、3者において下着は清楚な色、柄やシンプルなものを好むのに対して、上着は自分の容姿を目立たせる服装や有名ブランドものなどを好み、心理的高揚感、安定感を求めファッション志向性は積極的で、自己表現の一部と意識している。